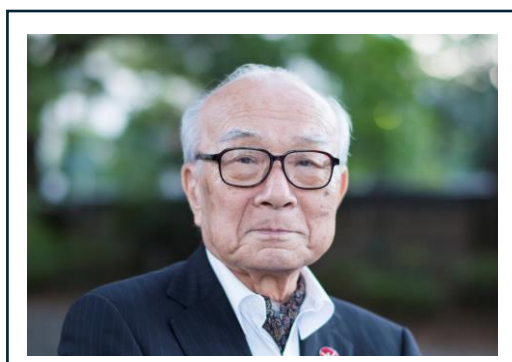


特別講演

核なき世界をつくる

ー日本被団協 70 年のあゆみー



田中 熙巳 氏

（日本原水爆被害者団体協議会 代表委員、

2024 年ノーベル平和賞受賞演説講演者）

講演者紹介～田中熙巳（たなか・てるみ）氏

山崎友子（災害文化研究会代表）

田中熙巳先生は、「日本原水爆被害者団体協議会」（略称：日本被団協）の代表委員（2017 年～）として、2024 年、日本被団協がノーベル平和賞を受賞した際、オスロで受賞演説を行われました。その演説は、日本のみならず世界の人々の心を打ちました。

田中先生は、1932 年満州で誕生、5 歳の時に父を亡くされ、母に連れられ妹二人とともに母の故郷長崎に身を寄せられました。そこで成長され、長崎中学校に入学された 1945 年 8 月に被爆。原爆は多くの命を奪い、生き残った人たちにその後厳しい苦難の道を強いるものでした。田中先生にも中学生であっても家族を養う柱となる生活があったことと思います。そのような生活の中で勉学を続ける気持ちを持ち続けられ、働きながら東京の大学で材料工学を学び、卒業後長年東北大学で教育・研究に携わられました。東北との縁も深いものがあります。

大学生の時、帰省した長崎で日本被団協の設立に遭遇され、それ以来日本被団協の活動に携われ、核兵器の廃絶を訴えてこられました。戦後 80 年、日本被団協設立から 70 年になろうとする年にオスロで、被爆体験を伝える「最後の世代」として「人類が核兵器で自滅することがないように！」と訴えられた受賞演説は、世界にその必要性を改めて知らしめるとともに、日本人に日本という国のあり方を真剣に考えさせるものでした。

田中先生は、この演説の冒頭、日本被団協の運動の基本的訴えを 2 点あげられました。

- ・国の「受忍論」に抗って運動が行われてきたこと
- ・「核兵器と人類は共存できない」こと

2 点目は広く知られていることですが、1 点目は、田中先生の運動に対する心情、国のあり方に対する信念を表しているものとして深く印象に残りました。「受忍論」とは、みんなでこの被害・苦難を受入れ耐え忍ぼう、という考え方で責任の追及に一線を画そうとするものだと思います。第二次世界大戦の終戦と日本被団協の結団には 10 年の開きがあります。このことにも、被爆者のみなさまの置かれた状況や核への思いが現実にはどのようなものであったかが滲み出ています。「受忍論」に抗って、というのはこのような現実に対する思いを表すことばでした。

災害ではどうでしょうか。受忍を強いられることはなかったでしょうか。2011 年から 15 年経過し、東日本大震災被災地では体験の継承や孤独等々様々な課題がある、と田中先生にお話すると、「私はシンプルに考えます」とのこと。どう継承するかではなく、何を継承するのが大切です。私たちの活動の目的は「核廃絶」この一点です。とお話し下さいました。

田中先生は先ほど盛岡駅に到着されました。「遠路お越しいただきありがとうございます」と申し上げると「遠くはありません。新幹線に乗ればたった 2 時間です」と返ってきました。先生は 93 歳です。深刻で複雑な苦難や課題に向き合うとき、田中先生のお話は、問題の核心をシンプルに考えようと励ましてくれることと思います。田中先生、どうぞよろしくお願いいたします！

【ノーベル平和賞受賞演説全文】参考 URL

日本被団協 - 「被団協」新聞 2025 年 1 月号 (552 号)

<https://www.ne.jp/asahi/hidankyo/nihon/about/about5-202501.html>

特別講演

講演の記録

核なき世界をつくる ー日本被団協 70 年のあゆみー

講演者：田中熙巳氏

（日本原水爆被害者団体協議会代表委員、2024 年ノーベル平和賞受賞演説講演者）

たくさん話すことがあるのですが、皆さんは体験者の話はあまり聞いたことはないかと思いますので、私の原爆の時の体験をお話ししましょう。

先ほど紹介がありましたように、1945 年の 4 月は私が中学校に入った時。今の義務教育の学校と違って、入試で入ってさらに 4 年から 5 年かけて旧制の高校や専門学校に進学するのが目的の学校でしたが、その中学校に入りましたが、4 月にはもう沖縄に米軍が上陸しております。ですから、授業などとてもやれるような状況ではないのです。もっぱら運動場を畑にしてみたり、山に行って葛の葉っぱを取って、デンプン取りの原料にしたりしました。それから戦車が上陸してきたら落下するような大きな壕を作るなどをしました。米兵が上陸してきたら落っこちるような蛸壺を作るとかですね。そういうことを中学生が実はもうやっていたのです。

ですから、特に 6 月には沖縄でも日本が敗北しますので、もう九州に間もなく上陸してくるだろうということはすでに想定しておりました。関東の九十九里浜とそして九州のどこかに上陸してくるだろうと。長崎は比較的上陸しやすいところでもありますので、6 月以降は上陸に向けて色々と備えた。本当に学校なんかやっている暇がない。

ただ、都市の爆撃は、東京をはじめ大阪や名古屋や福岡や仙台とすごい空襲を受けて、7 月、8 月になると壊滅状態にあるということを私どもは知らされていたのです。是非そのことをご存知になっていただきたいと思うのです。東京大空襲は度々ニュースになりますけども、実は東京だけが焼けてしまったのではなく、日本の大都市は全部焼けてしまい廃墟になっていたという事実があります。これは戦後アメリカのルメイさん（Curtis Emerson LeMay）に勲一等旭日大綬章を日本が授与したのですが、この司令官が日本の都市を壊滅しようという命令を出したのです。（今では）国際法上、市民を攻撃してはいけないというのがあります。第一次世界大戦以降、市民が近くにいる施設も攻撃してはいけない、やむを得ずする場合は市民に被害を加えないような管理・手立てをしてやるべきだというようなことも決まっていた。それにも関わらず、日本の都市の大空襲は最初から市民を殺すためにやったわけです。後で、日本の市民はもう戦闘員と同じである、国を挙げて戦おうとしているということは市民であっても戦闘員と同じであるので、戦闘員でない人たちを殺すということをやったのではない、と言うのがルメイの言い分だった。具体例をあげることはできないのですが、日本の大都市は全部壊滅した。

それは、新聞の端々から、そして南の方の基地は日本が追われていますからどんどん撤退しているというのわかっておりましたので、長崎に上陸するだろうと。ただ、長崎は爆撃されてはいないのです。市民がいるところは。これは広島も同じです。結果的には原爆の効果を見ることであったのではないかと考えています。広島の場合には本当にどこも爆撃してないのです。長崎には大きな工場地帯がありました。立派な船をたくさん今も作っておりますが、ご承知の戦艦武蔵、大和と

同じですが、ものすごい戦艦を実は長崎の工場で作っていたわけです。ですから、工場に向けてのかなり大きな爆撃がありました。特に8月の原爆の直前の7月29日と8月1日だったと思いますが、2回の大空襲がありました。70機ぐらいの爆撃が飛んでくる。繰り返し繰り返しね。上空には6機ぐらいしか入りませんから6機ぐらいの編隊で、例えば10回入ってくるという格好で、70機ぐらいの爆撃が入ってきて、爆弾を数百・数千発ですか落としているのです。これはほとんど工場を破壊しているということで街には全く影響はなかった。

私がたまたま学校にいる時に空襲警報が鳴りました。学校の裏が山だったので、山の中に逃げ、対岸の工場地帯への空襲を一部始終目撃いたしました。絶対自分の頭の上には落ちてこないという確信みたいなところがありまして、どんどん命中するのを見ながら感心をしたという空襲がありました。それから、6日に広島に原爆が投下されたということは、私どもは詳しく知らされません。ただ、新型爆弾を投下した模様と被害は調査中みたいなことは分かり、新型爆弾ということだけでちょっと違った状況だなというのは感じました。6日に広島をやっているわけですから、新聞に載るのは8日ぐらいです。どんな爆弾ができたのだろうと思っておりまして。それが、やがて自分の頭の上で爆発するとは思いませんでした。

長崎の爆撃は11時2分ということになっております。広島が8時15分になっています。その時間のずれは、後でわかるのですが、長崎に投下した原爆は小倉に落とすというのが第一目標だったのです。だから爆撃機は小倉にまず行っているわけです。今は北九州市になっていますが、小倉八幡は鉄鋼地帯、工場地帯があったのです。その小倉が選ばれて行ったのですが、隣の八幡の前夜の空襲の黒煙が全部小倉の方を覆っていて、目視できなかった。それでしばらく時間をかけたが、二つ目の目標の長崎に行こうということで回ってきたのです。だから11時という時間になる。

その日は朝早く空襲警報が鳴りました。「もう学校なんか行かん方がいいかな」と思い、家で寝転がって本を読んでおりました。作業は多分なかったと思うのですが、家の二階で寝転がって本を読んでいた時に爆音が聞こえます。それは爆撃の音だったのです。私は一機の爆音しか聞こえなかったのです。二機の爆音が聞こえたという人も結構いますので、どちらが本当かはわからないのですが、私は一機の爆音しか聞こえなかった。爆撃機が飛んできたな、偵察でもして去っていくのだろうと思っていたのですが、それが実は原爆だったのです。通り去っていくのだろうと思っていた瞬間に、「パーッ！」と光りました。もうこの表現はなんとも言えないのですが、この世の中が真っ白になるのです。もう何も見えないぐらい明るくなるのです。「これは何事だ！」と、これも生物的な反応で危険を感じますね。十三年間経験したことがない異常な状態になるわけですから、これは危険だと感じたのです。そして、二階から一階まで駆け下り、目と耳を両手の指でおさえて、その場に伏せました。爆発の気圧の変化で目玉が飛び出したり鼓膜が破れることもあるので、もう反射的に目と耳を塞ぎました。直後に爆音が爆風がやってきているわけです。衝撃波という空気の塊の爆風です。それが建物を壊して通り抜けていったわけですが、伏せている私は全然もう感じません。わかりませんでした。ということは気を失っていたから。多分音も後に来たという人がいますが、私には音も聞こえなかった。それから爆風が通り抜けているのも気がつかない。そのあと数分経ったのでしょうか。おふくろと二人の妹が一階に一緒にいましたが、おふくろが私を探す声が聞こえました。大きな声が。それで気がついたのですが、私は大きなガラス戸の下敷きになっていた。ですから、姿が見えないので、おふくろは一生懸命、心配になって大きな声で捜していたのだと思います。私がその声で起き上がろうとしたら、大きなものが上に乗っているのに気づきました。それは玄関のところにある大きなガラス戸ですね、それが二枚覆いかぶさっていました。結果から申しますと、そこにガラスが六枚ぐらいい入っているのですが、一枚も割れていなかったのです。大体、長崎市内の家でガラスがあって、ガラスが割れてないところはほとんどないのです。本

当に奇跡的しかないのです。私の上に覆いかぶさっていたガラス戸も奇跡的に割れてなかった。私は無傷で。打撲はあったと思うのですが、それは全部記憶を失っていますから、もう何もなかったという覚えです。原爆が爆発した瞬間の状況はそういうことです。

起き上がって、私自身は何でもなかったけれども、家の中はめちゃくちゃで、建物は潰れておりませんがぐちゃぐちゃに壊れていたということです。どうしてそれくらいの被害で済んだかと申しますと、実は長崎の原爆は目標を外れているわけです。やっぱりよく見えなかったのです。今のようないくつかの目標でなく目視なので見えないと落とすわけにいかないということです。目標地から三キロ余り離れたところ（爆心地）で爆発しているわけです。そこから勘定すると、私の家は3.2キロくらいの距離で、しかもその間にちょっと丘がある。金比羅山と言っていましたが、366メートルの丘があって見えません。爆心地になった地帯が目に見えないのですが、間もなくそこに落ちたということが分かりました。というのは、もうその空が真っ赤になっていきました。そのうち真っ黒になりましたから。真っ黒のところに太陽が映っている、真っ黒の棒の中に赤い光、太陽の光が見える。「あ、あれが太陽だ」というふうに思ったのを記憶しております。もうその時は大災害です、大火災になっていました。

原子が持つエネルギーがどのように出るかというと、原爆の場合、核分裂、例えば二つの核を結合させているエネルギーがあるわけですが、余分のエネルギーをもらって新たに分裂するときにそれが放出されるのです。数多くの原子核からのエネルギーの相互作用によるその放出を連鎖反応と言いますが、無数とも言える数の連鎖分裂で放射されるのを一瞬に起こさせるというのが原爆の原理なのです。そのエネルギーが強大なので、まず光になったのです。光と同時に放射線（ガンマ線や中性子線など）や熱線になっています。それは最初にくるわけです。その後、爆風になっています。その光と同時ぐらいに放射線が出ています。放射線は、光と同じように目に見えませんが、放射線はちょっとした建物は通り抜けていくし、人間の体を通過していくし、近いところではそれだけで死んでしまうというようなものです。その後に爆風のエネルギーが来る。だから、三つのエネルギーになって襲いかかってくるというのが原爆です。直下型だからどうなるかというと、広島も長崎も普通の爆弾のように地上で爆発はさせていないわけです。上空で爆発させたのですね、五、六百メートル上空で。その方が、効果が非常に高い。上空で爆発させたのが傘の形のように下に破壊をもたらすわけです。まず光、熱線は直下にいた人たちに全身大やけどをさせている。それから建物は五百メートルから一キロメートルぐらいの範囲は、着火して全部燃え上がるのではないのでしょうか。燃えやすいとザーッと火がついていく。最終的には延焼で街が全部なくなりましたが、そういう着火をします。それから放射線は見えません。これは最後まで分かりません。これがその後被爆者たちを苦しめた最大のエネルギーなのです。被害なのです。

私の家は壊れたけれども、燃えもしなかった。放射線も三キロぐらい離れていましたから、かなり弱まっていたというふうに思います。その後、家族全員なんとか生きてくれました。ただ、あの爆心地にはおばさんたちが二か所・二所帯住んでいました。私は五歳の時に父親を失ったので母子家庭になりました。日本は中国に侵略したのです。1931年に満州戦争という戦争、満州事変です。戦争というより事変というのをやった。私は翌年に満州で生まれました。五歳の時に向こうで父親が亡くなりましたので、母子家庭になりました。母は子供四人を抱え、父親と母親がいる長崎市内に帰ってきたというか、移転したのです。私どもは帰ったのではなく、初めて行ったのですが、伯母たちの二所帯が残念ながらその爆心地地帯に移転していたのです。そっちの方が安全だと。どちらかというと過疎なので安全だということで、一年前か半年前に移転をしていたのです。それで犠牲になりました。当日も翌日も何の連絡も入りませんし、大火災のことも分かりましたので、3日目に、確認のため焼け跡に入っていました。街全部が燃えていますから、街から入れな

い。そこで、山の裏にある森を通して入って行ったのです。峠を越して爆心地帯の谷へ。谷から川が繋がるのですが、入っていく途中、もうすでに何十人という亡くなった人たち、怪我をしているけれども何の救援も受けていない人たちがいる。遺体の収容や病人の看護に対する体制は 3 日後でもできていないわけです。もう何千人という人たちが殺されたり傷ついたりしていますから。病院はほとんど壊滅しています。爆心地帯に大きな大学、医科大学付属病院があり、これは市民が頼りにしていた病院ですが、ここも壊滅しています。だから、私が救援のため峠に出て伯父さん伯母さんたちの家に到達する途中、何百人も焼けたり怪我したりして亡くなっている人、それから亡くなってはいないけれども傷ついている人、傷ついているけれども動く力もなくなっただじっと下を見ている人、そういう人たちの姿をしっかりと見ていたのです。最初の 5、6 人を見た時までは、「これはかわいそうだな、大変だな」というふうに思った記憶はありますが、その後は全くもう記憶はありません。映像が目に残っているだけです。無感覚になっていました。やっとおばさんの家を探し当てます。というのは、周りの家がみんななくなってしまうと、建物がどこにあったかというのは本当にわからなくなってしまうのです。土台石しかないものですから。それで伯母さんの家を探すのに 1 時間くらい時間がかかりました。土台の格好といろんな関係で、「ここだ、ここに間違いない」と。その辺にも遺体が散乱しているのですが、間違いないと確認できたところで、伯母さんの遺体と孫だった大学生で休暇でたまたま東京から田舎の家に帰ってきたのが、真っ黒こげで転がっています。家の跡がわかると、あとは身長だとか女性だとか男性だとか推定をして確認したのですが、結果的にそのおばさんの家は爆心地から 400 メートルでした。もう一人の叔母さんはどうなっていたのかと探しました。今 700 メートルと分かっているのですが、その家は 1 軒家で、割と大きく、平和な時に牛を買って牛乳なんかを作っていた家でした。周りは全部野原になって、元々が雑木か草原で牛が草を食っていたと思いますが、燃えていないだろうと推定しておりました。行ったのはおふくろと私と二人だけです。妹たちを近所の人をお願いしていました。「そこは燃えていないだろう」と、最初からおふくろと話をしておりました。本当にその 1 軒だけ潰れたものの残っておりましたので、なんとか大丈夫なんじゃないかと思って家に近づいていったら、伯父さんの親戚の人たちが二人来ておりましたが、もう伯母さんは亡くなったと聞きました。私たちが来る前に亡くなったので、これから荼毘にしましょうということで、「その前にお会いになりますか」と、私のおふくろに言ってきたのです。もう亡くなったわけですし、途中大火傷で亡くなっている人たちをいっぱい見えていますから、「もういいです」と、おふくろは気丈でした。私もその時一緒に野原で木切れを積み上げて、トタンの上に遺体を乗せて焼くということをやりました。時間がかかりました。時間から言いますと、先に遺体の焼きに入って、それから真っ黒焦げの伯母の家を探したということになっています。その伯母さんは大火傷でも死んだわけです。

おふくろの親父であるおじいさんはその伯母さんの家にいたのですが、おじいさんは大火傷でもまだ生きておりました。生きておりましたけど意識はないという。わからないのですが、まだ呼吸はしておりました。じっとただ座っているだけでした。もう 2、3 日で亡くなるだろうということがわかって、声をかけても誰か来たという気配を感じるぐらいで、「おじいちゃん」と言っても何も反応なしでした。「伯父さんはどうしていないのですか？」と言ったら、伯父さんは何も怪我もしなくて元気だったので、すぐに伯父さんの田舎の方に救援を求めに出ていったという話だった。「ああ、よかったね。」と言っていたのですが、その伯父さんは結局救援を求めに行った先でパタッと倒れ、そして一週間ぐらいで亡くなりました。怪我也何もしていなかったのですが、一週間で高熱で亡くなったとわかりました。まさにこれは放射線。放射線だけで命が奪われたっていう例です。だから、そういう人たちもいるということです。

比較的近距离で放射線だけの影響を受けた人たちは、伯父さんの時は七百メートルですが、一キ

ロだとか、一・五キロ以内で命が助かったと思った人たちは、実は放射線で体中を傷つけられ、それが命取りになっている。(原爆は)そういうふうにして人々を殺していく。それから火をつける。広島も長崎も二キロ、半径二キロぐらいの街は全部なくなり、建物はなくなりました。そういう焼け方をしている。それから木材はコンクリートの建物の中で全部焼き尽くされ、外側が瓦礫のように残る。今のウクライナ見てみると、残っている建物があります。ああいう感じでコンクリートだけ残っているのです。木造はもう一軒も残っていないというような状況でありました。

帰りは、無くなってしまった街の中に一列か二列ぐらいで人が歩けるところが作られていましたので、その道をたどって帰りました。その途中に川があり橋を渡るのですが、その下の川の側にも亡くなった方がほとんどもう裸みたいになって、何十人と重なっているのです。ちょっとでも水がありそうなところには人が集まっている、車はなくなっている。それから、二キロぐらい離れているところでしたが駅の近くまで行くと、収容した何十人という遺体を、ほとんど女性、おばさんたちでしたが、亡くなった遺体を並べ焼却を待つという状況に置かれる。そういうのを一日見て回って、「これが戦争かな」と思いました。

私は軍人志望だったのです。中学校に入った時も軍人の指導者になろうと思って入ったのです。だから、軍事のことだとか戦争のことについてはある程度の知識を持っていました。戦争で殺し合いをするというのはやむを得ないことだと思っていたのです。でも、市民が目の前で何千人も死んでいる姿、もう無残な死に方をしているのを見て、「これは戦争じゃないんじゃないか」というふうに直感的に思いました。それが今日、戦争は絶対にしてはいけない、特に核兵器は使ってはいけないという信念になっているわけです。というのは、核兵器は普通の武器と違います。ウクライナがあれだけ空襲を受けていますが、死んだ方たちは百何人であつたとかいうふうに書かれています。が、何千人が一挙に亡くなったとか、何万人がいったん亡くなったという報道はありません。まだ核兵器は使われていないということです。核兵器を使うことがあったら、何万人という死者が出てくることになります。ということは、核兵器は戦争に使う兵器ではないというのが私の信念です。兵器の名に値しないというふうに言っているわけです。悪魔の道具、兵器ではないと。戦争に使えない道具だというふうに言っております。

ぜひ核兵器だけは使わしてはいけない。核兵器だけは一番早く地球上からなくすということに、地球市民、全員が力を合わせないと、私は大変な地球になると思う。本当に人類が破滅するかもしれないと私は言います。核戦争が起こって、世界中に広まっていった時に人類は破滅します。生き残ったとしても、もはや今と同じ人類ではないというふうに思います。だから核兵器は絶対になくさなくてはいけないと思います。

今日お話ししたこと、核兵器の被害がどういうものかということ、皆さん、今までと違った感覚で受け止められたということであれば、本当に嬉しいのですが。そういう兵器だということを今の方たちはもはや感覚的に感じない状況になっていると思います。わかっている、核兵器という言葉として言っています。核兵器としては大変な被害を及ぼすのだということを知っている。しかし、その大変な被害というのはどういうことなのだと知らないまま核兵器を議論するという状況が市民の中にもあるし、政治家の中にはもろもろ、ありあり、と私はあるのだと思います。

プーチン大統領すら、核兵器を使うこともあると脅すなどとはとんでもないことです。このことから言うと、プーチンさんはあくまでそれを使おうというわけですから。日本の大臣も新しくなった大臣たちも、日本の核保有を検討してもいいかと言う。「非核三原則」というものがあります。佐藤栄作さんが沖縄返還を行った時に表明した「非核三原則」。作らず・持たず・持ち込ませずというのが「非核三原則」です。持ち込ませずというのは、まだ米軍がいたこともあり、米軍が例え

ば軍艦に核兵器を積んでいたりするわけです。何か緊急なことがあった時に、米軍が核兵器を持って日本に来て、戦争の支援をするというようなこともありうるというのは当時の想定でありましたので、それも許してはいけないというので、核兵器を持ち込ませず、というふうになっているわけです。もちろん、沖縄の空軍基地に核兵器を置いていたりしてしまして、そういうことなどは許せないということで、三原則の一つに「持ち込ませず」が加えられています。それを見直そうということ自体が、やはり政治家という人たちも核兵器を知らないのだと私は思うわけです。だから、これはそういう人たちを選挙して当選させた市民たちの問題です。だから、もう日本の国民は挙げて政治家を選ぶ時には、「核兵器のことについては絶対使うことや存在させることを考えてはダメだよ」ということを言いつけないとダメじゃないかというふうに思います。

ぜひ人間的な被害がどういうものか、放射線と熱線と爆風でやられる、同時にやられる被害ということを感覚的に理解していただいて、多くの人に広げていただきたい。そういう被害を受け広島で亡くなったのは14万人です。長崎が7万4000人。合わせて21万4000人の市民が2発の爆弾で亡くなった。命を奪われた。それはその年の12月までですから、12月以降、毎年放射線の影響で亡くなっている人が続いたのです。それは記録がありません。残念ながら自治体も記録できていませんし、市民たちも記録しておりませんので、何万人の人がそうしてわからないまま亡くなっているかということとはわかりません。

被爆者に対する救援のための法律ができるのは、それから11年、12年経ってからです。それは原爆の被爆者たちが力を合わせて、その原爆の被害は戦争による被害だから、国がきちんと被害に対して対応してほしい、病気に対しては治療を出してくれ、生活が苦しいのは国が何とかしてほしいという要求を運動としてやってきたものです。実は先日迎えたばかりの「3.1」があります。1954年3月1日、(マーシャル諸島)ビキニ環礁で日本のマグロ漁船が水爆実験の被害を受けて乗組員の23人全員が急性原爆症で港に帰ってくるということになりました。そのうち久保山愛吉さんという通信長さんが亡くなる。9月にはもう亡くなるわけです。そういう状況が起こって、実は日本人は初めて原爆というものを知のです。原爆が非人道的な兵器であることは、知ろうと思って初めて知のです。というのは、7年間アメリカが占領しておりました。そのこともぜひしっかり覚えていただきたい。7年間は日本が占領されているのです。占領下は自由にならない。その7年間、原爆の被爆者は被爆の実態を他人に喋ってはいけなかった。書いてもいけなかった。手紙に書いて送ってもいけなかった。ですから、長崎市と広島市に残っていた市民たちはお互い様だからみんな知っているけれども、その街を出た人たちはみんな孤立しているわけです。友達がいたとしても、友達に喋らない、要するに喋らない、書けないということで、7年間、日本の国民は広島と長崎にどういう爆弾が落とされたかということを知るチャンスがなかった。それで独立するので、7年経ったら。ところが、7年経って独立しても、日本の政府は何もしなかったのです。原爆の被害者もどうなっているのだろうというのは全然関心がなかった。先ほど言いましたように、大都市全部が壊滅していますから、その街をどういうふうに復興するかに対し頭がいっぱいで、広島と長崎を何とかしなくてはという頭は全くない。広島と長崎の自治体もそれだけの力はない。それで10年間放っぱらかされます。結局放っぱらかされているところに3.1の水爆の実験があって、水爆の実験を国民が知り、広島と長崎の原爆についての関心が起こる。それで全国的に被爆者たちがどこかで苦しんではいないか、助けてあげないといけないのではないかという運動が起こる。

第一回の原水爆禁止大会は、ビキニ事件の放射能汚染の判定結果が分かり、1955年に広島で行われる。第二回世界大会は1956年に長崎でありました。長崎の大会では、全国で探し出された被爆者たちが団体を作り、一緒に行きましよう誘われ、たくさんの被爆者たちが長崎に来ました。

大会の中に分科会があったのですが、被爆者救援分科会というものがあり、長崎に来た被爆者たちが一堂に集まりました。私はたまたまそこにいたのですが、皆さんちょっとお集まりくださいという声がかかり、被爆者たちが別室に移動し、規約案や発会宣言案などを準備し、その分科会を使ったのが日本被団協の発会式だったのです。その時に発足した会が原水爆被害者団体協議会という、七十一年間ずっと活動続けてきた私たちの会になっております。現在 私はその会の代表委員をやっているわけですが、そうやってできた日本被団協ですので、被団協の構成は各県にできた被爆者団体の協議体で、それらの代表によって中央の役員会（代表理事会や事務局役員会議）が構成されています。今日おいでになっていらっしゃるんですが、岩手県にもちゃんとできておりました。青森県にもありましたし、もう東北6県全部、北海道にもありましたし、本当に四十七都道府県に二、三年のうちに会ができて、その被爆者たちが力を合わせて、今日まで自分たちに対する援護、被爆者に対する援護と、それから自分たちが被害を受けた原子爆弾は絶対に使ってはいけないし、地球上からなくさなければいけないという運動を七十一年間続けてきたわけです。しかし、核兵器はなくすまでまだ至っていません。

ただ、核兵器は使ってはいけないという国際条約は2017年に作らせたので、まずそこに多くの国が加盟すれば、本当に使うということはできなくなる。三原則も何も私はいらないと思っているのですが、日本はそこに加盟しておりません。それからアメリカとかフランスとかロシアだとか中国だとかイギリス、これらは核保有五カ国というのですが、核保有五カ国はその禁止条約に加盟しておりません。賛成して反対したのです。それは、核兵器を使って自分が大国であるということを世界中にずっと維持したいというのがあるわけだからです。だから条約の制定にも反対したと思いますけども、そんなに大きくないフランスやイギリスにしても、二百発、二百五十発ぐらいの核兵器は持っている。ロシアとアメリカは五千発ぐらい持っています。中国は今まで二百五十発ぐらいしか持ってなかったのですが、ここ二、三年で大国を目指しており、今五百発ぐらいまで増やしているのではないかと言われておりますが、それらの大国は禁止条約に入っておりません。被爆者がいる日本の政府がどうして先頭に立って禁止条約に入り、多くの国々に対し、特に同盟を組んでいる核兵器保有国に対し、禁止条約に入ろう、そして世界中に核戦争を起こさないという約束をさせようというふうになってくれないか。これには、そうさせるまでの国民の力もないのだと私は思っておりますが、やはりそういうものに反対する政府に対して物言う国民を私たちは増やしていないといけな。核兵器で守ってもいい、守った方がいいかもしれない、日本も持った方がいいかもしれないという第2潮流が今生まれてきております。

先ほども申しましたように、核兵器と普通の兵器は違うということをきちんと投票した人にもわかってもらい、そして日本の政府が先頭になってほしいと思います。2017年の条約からもう五年経ったのです。五年経ったらどれくらいその条約が実施されたかという検討をやらないといけな。五年ごとに歩みを検討するということになっているのです。今年は十一月に最初の第1回の検討会議があります。ここに日本の代表、市民の代表も行く。もちろん日本被団協の代表も行って発言する機会をもらいたいと思っています。もう一つ、核兵器不拡散条約というのがあります。先ほど言った五カ国は持ってい、それ以外は持っていけないということを決めている。しかし、五カ国は減らすということが暗黙の約束になっているのです。ところがこのところ減らさないのです。フランスはもっと増やそうなんて言ったりして減らさない。

五カ国は削減に努力するっていうことになっています。条約を作ってから5年ごとに、再検討会議っていうのをやっています。今年4月、ニューヨークであります。それには日本の政府の代表も行くと聞いております。日本被団協の代表も行って発言するということになっていると思いますし、このような機会に日本被団協はニューヨークの国連のロビーで原爆展をやってきました。5年

ごとの会合に 2005 年から展示をしましたので、それが核兵器禁止条約を作っていく上で大きな力になったと思っています。

最後に、そういう被爆者の援護をやれという運動に、大きな立派な法律を 2 つ作らせました。それでかなりのところまで援護が今届いております。しかし、亡くなった人に対しては何一つしていません。それはもうすごい恨みやつらみがあるのです。家族たちには。家族全員が亡くなった人がいっぱいいるわけです。しかし、その人たちには何にもないわけです。そういうことがあり、恨みやつらみがあり、それを我慢しなさいというのが先ほど説明があった「受忍」です。戦争の被害は、国民が皆受忍することなのだ。しょうがないのだ。受忍してもらわないと戦争にはならないのだというのが国の方針なので。だから、これから戦争があったとしても、そういう被害は我慢しなさいということになる。それじゃダメです。私たちは受忍ではダメ、受忍しないということを言い続ける。その怨念がある私が（ノーベル平和賞受賞演説）発表の時に原稿に書いていなかった、もう一回、もう一度繰り返しますと言って、亡くなった人には何もしていません、という言葉になったということです。すいません、付け加えて時間を取りまして。どうもありがとうございました。

＊録音・録画をもとに編集委員会でまとめました。

著作権は災害文化研究会にあります。

<質疑応答の記録>

司会

田中先生、本当に貴重なお話を聞かせていただきまして、ありがとうございました。 それでは皆様の方から質疑、ご意見を伺いたいと思います。今日は会場限定ということで、あまり時間がありませんので、お二人ぐらいになるかなと思うのですが、発言されたい方は挙手をされてください。いかがでしょうか。せっかくの機会ですので。質問でもご意見でも構いません。

質問者 I

私は 80 歳になります。終戦の生れになりますが、戦争のことを知っている人たちがどんどんどんどん減っていく。この前ちょっとショックを受けたのは、若い人におじさんたちは平和ボケしていると言われました。あっちこっちの国は今、戦争や戦闘行為をしているのに、平和憲法で核廃絶といえど平和になると思っているという話を聞いてショックを受けました。この 80 年間、日本は戦争をしなかった。先進国で唯一ですが、以前は侵略という戦争もありました。三百何十万人の日本の国民が亡くなりました。そういう反省に基づいて平和憲法というものが作られたと思います。80 年間戦争をしなかったという実績がある。これは世界でも崇高な実績だと思います。そういうもので、例えば、プーチンに向かって貴方の国には私は侵略しません、証拠として 80 年間を見てくださいというふうな強い外交が展開できなければ、このまま戦争を知らない人がどんどん増えていく。今、確かに流れは後戻り出来ない方向へ向かっているという気がします。私たちもいずれ間もなく亡くなります。知らない人が大半。そういうところでどうやってこの気持ちを伝えていけばいいのかというふうなことを考えても、なかなかわかりにくい。東日本大震災でも 15 年経って、これからどんどん知らない人が増えます。どうやって伝承するというのが災害復興という面で今課題としてあります。戦争は最大の災害です。これにどう向かっていったらいいか。簡単な答えはないのですが、先生から何か一言お願いします。

田中熙巳先生

第一に戦争をリアルに、みんなが理解することだと思います。平和ボケしているあの年寄りはずね、やっぱり戦争を知っているところがあるのです、小さい体験でも。だから当然やっちゃいけないものだというのはあって、しかも日本の憲法は立派な憲法ですからね。あれは作ってもらったのではないですからね。日本人が作った立派な憲法です。しかも先ほど言いましたように、日本の都市が全部壊滅していたわけです。そのことを子どもたちは知らないかもしれないのですが、そういう体験をね、もうしてはいけないし、他の国にもやらせてはいけないという思いが平和憲法に結実しているのです。保守系の政治家たちも、かなり右よりの政治家たちも、戦争をすることについてだけは、やっぱりわかっていただいて。昔から、自民党の代表と話をしても、戦争することだけはやるべきじゃないのだということを言う政治家がたくさんいました。ですから、今までできなかった。ボケているのじゃないのですよ。戦争をしていた人たちがなんとかここまで守ってきた。だけど、もう戦争を知らない人たちがゲームのような感覚になっているのじゃないかというふうに私には思うのです。

一番いいのはやっぱりみんなで話し合うこと。私、全国をずっと回ってきて感じるのは、お互いにいろんなことを話し合う空気がほとんどなくなっているということです。一人一人から私にどうしたらいいかって、どういうふうに相談していったらいいかというようなのがないのです。私は、国民の皆さんが、労働者もね、分断されてしまっていると感じています。これは、今の仕事の関

係、教育の関係、全てがね、一人一人を分断していくやり方になってしまっているのですよ。教育は競争させるでしょ。労働は格差をつけるでしょ。もうその他に分かれてしまいますのですね。協力できない。いつ自分が出されてもわからない。そういう状況になっているから、まずそういう状況を変えていく。いい意味での昔のお互いに助け合うという世の中を取り返していくということを考えた方がいいと思う。若い人にお願いしたいです。もう周りを信頼するということから話し合いをして、そして集団の力で経済も政治も変えていくと。今の経済は最悪ですからね。競争させて大儲けをしようとする人がいる。大儲けをする人は絶対戦争に加わりません。戦争が終わった時に安全なところにいますから。どんどんどんどん人は亡くなっていくけど、儲けはどんどん入ってくると。トランプさん見ているとそんな感じしませんか。火をつけて騒がせたら、うまくいったという。うまくいったって自分でも言いますよね。この話はまた長くなっちゃうのですが、要は皆さんがお互いに信頼する状況で、これが新しくまた作って行って、そして日本の国が戦争の方向に行かないように、やっぱりきちんと政治家たちに物申すということが。競争で負けたって死ぬことはないですからね。本当。競争で偉くなったって、やっぱり行くところにしか行かないのですよ。本当に金持ちになる人はどんどんどんどん金持ちになっていく。偉くなる人はどんどんどんどん偉くなる。その人は上手になるわけだから、(他人の)それを目指す必要はないね。あまり長くならないようにします。幸せな社会を作っていけばいいということだと思います。

質問者 2

釜石市から参りました。また、一市民の平凡な考えなのですが、今のお話をお聞きして、今一つ怖いのが原子力発電所のことです。福島の実験をしたにも関わらず、また原子力発電所を再開させよう、また新たに作ろうというニュースを聞いて、とっても怖い思いをしております。なにかいいことであるようなニュースも聞こえてくるのですが、とっても怖いので、原子力発電所について先生はどのようにお考えなのか教えていただきたいと思います。

田中熙巳先生

私は、元々は理学部出身の、それまでは工学系の研究をした人間なので、技術が進歩することが非常にいいことだと思っているのです。原子力発電の原理も私は非常にいいことだというふうに思っているのです。しかし、先ほど申しましたように、原子力のエネルギーは非常に大きいエネルギーですから、その使い方をちょっとでも間違えると大変なことが起こる。そのことを私たちは警告をしてきていて、日本はまだ原子力発電をするような国ではないと言ってきたのですが、あれもやはり代理会社、アメリカのウェスティングハウスという大きな会社がありますけれども、ウェスティングハウスの発電機を日本に持ってきて原子力発電をやった。しかもあんな浜辺にね。あの発電、原子力発電所を作るなんてとんでもない間違いなのです。それをよく知らない人たちが作っていたということがあって、あの事故が起こった、と私は思います。私は技術屋たちを教育した人間として、どこに作っても事故は必ず起こります、と言います。人間の間違いというのは必ず起こります。そういうふうに考えると、原子力の発電というのも必ず事故を起こします。

だから、事故を起こした時に生ずる被害から考えると、原子力発電は使うべきではないというのが私の信念であります。どんなに良いエネルギー源であったとしても、どんなに安くても。(本当はね、安くできないのです。)そういう安全性をね、100%に近く確保しようとしたらできなかったのです。この前もそうですが、津波が来た時どうしますかと、ちゃんと提言があったわけでしょ。それには、うんと高くすると、敷地を高くするとお金がかかると。それでは電力が高くなるのじゃないかというので、社長がうんと言わなかったわけでしょ。実際に津波が越えてきてしまったこと

を知ってしまいましたから。私から言わせれば、どんなやり方をしてもね、技術的に事故っていうのはね、避けられないのです。人間の仕事では。原子力のエネルギーを使う時も同じだと思っているから（原発再稼働には）反対しましょう。大きな声で。

質問・意見 3

一言言わせてください。一応私も岩手で腰を据えてやってきた人間になりますので、世界のこの狭いところで、地震・火山噴火の被害想定地域が1割。これほど危険な土地はありません。一発起きたら取り返しがつかない。この前の能登半島付近でも地殻変動 5メートルも地面が上がりました。志賀原発にあれが届かなかったというのは、神の加護があったのではないかというふうに思います。この意味では反対ですが、岩手で知っておいてほしいことは、実は 70 年代に田野畑村に原発の計画が立ち上がっていました。この反対で計画はなくなりました。もしできていたら、3.11 で岩手県は壊滅でしたという事実はよく理解しておいていただきたい。そういうことも全部含めて、国民がロシアンルーレットでたまたま「当たらねえだろう」と思い、「いいわ」と合意するのだったら、推進するという余地もあると思いますが、今多くの国民が疑問を持っています。でも、一部の経済原理で進んでいるというのが現状で、これについても一人の研究者としては、私は非常に憂いておりますということを申し上げさせていただきます。

田中熙巳先生

儲けるとかね、発展とか言い過ぎますね。もう十分に私は発展していると思うのですよ。だから政府や地方自治体が言っている発展っていうのは、自分たちのお金がどんどん回って、どんどんどんどん利益がついてくることが発展です。私に言わせれば、もっともっと農村を大事にした生活に日本人は返っていった方がいいと思っています。

司会者

まだまだ話は尽きないと思いますけど、お時間がまいりました。それでは田中先生の特別講演をこれで終了させていただきます。田中先生に盛大な拍手をお願いします。

＊録画をもとに編集委員会でまとめました。
著作権は災害文化研究会にあります。